前期〈組版・タイポグラフィ論〉第7回　20170527

紙寸法と単位

前田年昭 t-mae@kobe-du.ac.jp

書物の発生（壽岳文章）

紙が書物の形態を規定した。これは紙の性質によって、中国や朝鮮あるいは日本で発達した袋綴じ型と、西欧で発達した両面印刷型と、二つの系統が立てられる。かりに前者を東洋型、後者を西洋型と名づけて、その相違をくらべてみると、いろいろおもしろい結果が見られる。たとえば、東洋型の背中は解放的で、特別な場合を除き、一部分にのみ裂〔キレ〕または紙片をつけて装飾と保護とを兼ねさせ、全部を蔽ってしまうことはない。しかるに西洋型のは必ず背中の全部をかくし、かつ見返しをつける。本文にしても西洋型は左上からはじめて右に伸び、各行は横に下方へ発展するのに反し、東洋型では右上からはじまって左に及び、各行は縦に移ってゆく。頁の余白にしても、東洋型は上に多く、西洋型は下に多い。用紙の性質がこういう相違をもちきたすの

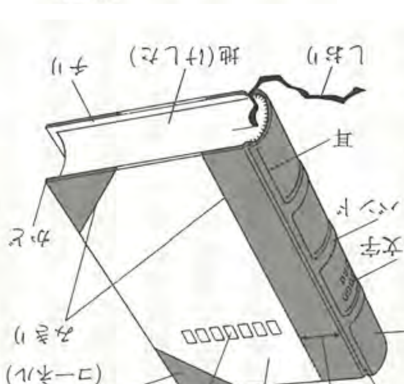
である。西洋の紙は、手漉きのも機械漉きのも、繊維の処理がこまかいため緻密堅厚で両面印刷が利くのに対し、東洋の手漉き紙は繊維が長く粗放で、かつ板張りの関係上どうしても裏表ができ、厚葉紙でも片面しか印刷ができない。長所や欠点はどちら側にもあろう。目方の軽いのは和本などの長所であるが、片面がまったく無駄になっていること、背中が保護されていないためそこから傷みやすいこと、表紙が柔らかなので立てるわけにゆかず、いつも赤ん坊のように寝かしておかねばならぬこと、などは保存整理上不利な点である。西洋のは背中が保護されているので綴じのくずれる心配はないはずだが、製本に手を抜いた場合──この場合がはなはだ多いのである──中味と表紙がばらばらになって、中味が醜い背中をさらすことがある。こうなると、最初から背中をきちんとさせている東洋型にもなかなかすてられぬ美点が見つけられる。形態という点では、東洋型・西洋型がもっとたがいの長所を活かしあうべきではあるまいか。もっとも、西洋のある好事家の造った豪華版に、きわめて分の厚い西洋紙を使っていながら、わざわざ二つに折って袋綴じにし、なおごていねいに袋の片面だけ印刷して残る四分の三を無駄にしているのなどは、はなはだ困りものである。

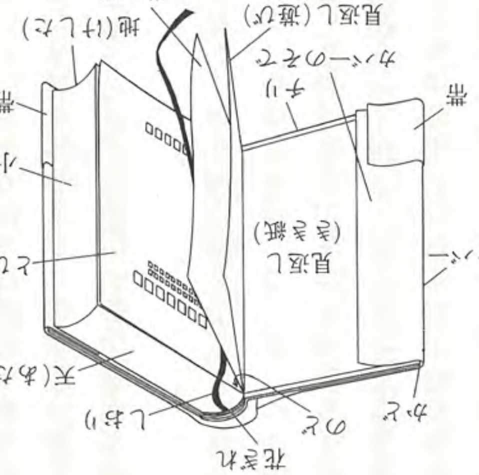
パルプ工業の発達は、一応私たちの間からでさえ東洋型の書物を消滅させ、いまや世界中の書物が、横書きと縦書きの区別はあっても、だいたい同じような体裁をもつようになった。パルプで漉いた紙ははなはだもろく、これで作った書物の生命もまたしたがって短い。しかし多量に印刷され翻刻され複製されるから、文献の伝承という点では、それほどの心配はなかろう。問題は、世界のパルプ資源が刻々に減少してゆくおりから、いかにして耐久力のある紙を、安く、多量に、

しかも書物に向くように作るか、にある。書物が紙に頼った時代はもう過ぎようとしているとの観点から今後の書物を、光学や音響学の発展と結びつけて再出発させようとの大胆な試みも、アメリカあたりには行われているようである。しかしながら、樹皮やパピルスや羊皮紙の時代を経てついに今日の形を取った紙の書物は、すでにそれ自身の工芸的な美しさをそなえている。ベークライトはどこまでもベークライトであってついに陶磁器の代用とはなり得ないと同様に、よしどんな新しい形の書物が生れるとしても、従来の紙の書物は残るであろうしまた残すべきであるし、また残るに値するだけの数々の美点をもっているのではあるまいか。書物が大学を無用にするとの論に賛意を表し得ない私は、また、マイクロフィルムの普及が在来の書物を無用にするとの論にも賛意を表することができない。どちらの場合も、高貴な人間性をふみにじっているからである。私はあくまでも書物本来の姿をつきとめ、そのあるべき座に安らかならしめたいと願う。

初出：『書物の世界』一九四九、朝日新聞社（『壽岳文章書物論集成』一九八九、沖積舍、資料ＩＤ 0118966C 請求記号 020.4||JUG）

本の各部分の名称





紙の寸法と取り方

表 4·1　紙加工仕上寸法（JIS P 0138）（単位 mm）

番号	A　列	B　列	寸法許容差
0	841 × 1189	1030 × 1456	600 mm をこえる場合　±3
1	594 × 841	728 × 1030	
2	420 × 594	515 × 728	
3	297 × 420	364 × 515	
4	210 × 297	257 × 364	150 mm をこえて 600 mm 以下　±2
5	148 × 210	182 × 257	
6	105 × 148	128 × 182	
7	74 × 105	91 × 128	150 mm 以下の場合　±1.5
8	52 × 74	64 × 91	
9	37 × 52	45 × 64	
10	26 × 37	32 × 45	

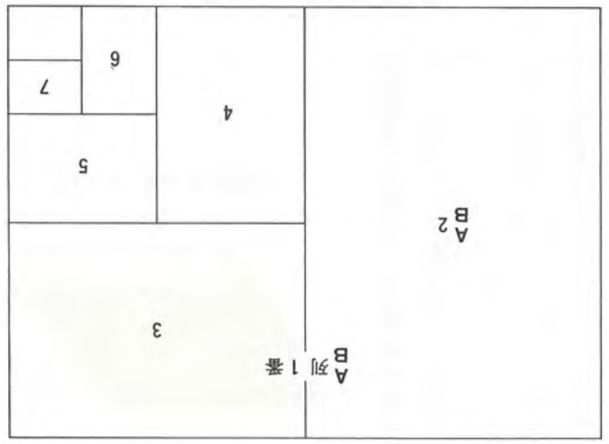


図 4·2　規格による紙の取り方例

本や雑誌の判型と規格外の寸法

A６判	105 × 148mm	…文庫判ともいう
A５判	148 × 210mm	…学術書や総合雑誌など
A４判	210 × 297mm	…雑誌など
B６判	128 × 182mm	…小説など
B５判	182 × 257mm	…週刊誌など
B４判	257 × 364mm	…雑誌など
四六判	128 × 188mm	…単行本でもっとも多い

表 4·2　規格外の出版物仕上がり寸法例

名　　称	取り方	仕上がり寸法
四　六　判	4× 8 裁	127 × 188 mm
		130 × 188
菊　　判	4× 4	152 × 218
		152 × 221
A 判 40 取	4×10	82 × 148
B 判 40 取	4×10	105 × 173
		103 × 182
A 判 20 取	4× 5	148 × 167
B 判 20 取	4× 5	182 × 206
A 判 12 取	3× 4	210 × 200
B 判 12 取	3× 4	260 × 240
A 判 24 取	4× 6	140 × 148
B 判 24 取	4× 6	170 × 182
A　B　判		210 × 257

＊　規格外仕上がり寸法は一例を示した．なお，このほかにも 28 取，48 取などがある．

本の内容と構成

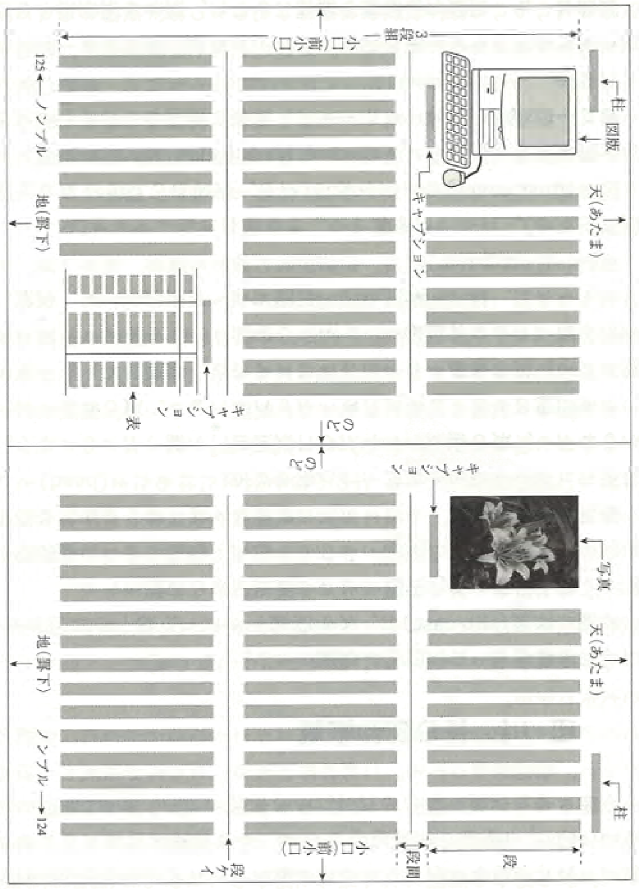
前付	トビラ
	口絵
	献辞
	推薦のことば
	序文（まえがき・はしがき）
	凡例
	目次
	図版目次
	表目次
本文	中トビラ（半トビラ）
	本文
後付	付録
	索引（またはあとがき）
	あとがき（または索引）
	奥付
	奥付裏広告

単位

$$1_{\underset{\text{歯 級}}{\text{H (Q)}}} = 0.25_{\text{mm}}$$

$$1_{\text{mm}} = 4_{\underset{\text{歯 級}}{\text{H (Q)}}}$$

紙の本・雑誌の組版の設計と施工には mm と歯（H）を使う。

ページを構成する部分の名称